公立大学法人
静岡文化芸術大学
SUAC

2020 秋号 vol.11

碧い風 広報誌

特集 特別鼎談 コロナの先に、描く未来とは。

SUAC 2020

静岡文化芸術大学広報誌 碧い風 Vol.11 2020年10月1日発行 発行／公立大学法人静岡文化芸術大学

〒430-8533 静岡県浜松市中区中央2-1-1
TEL.053-457-6111（代表） FAX.053-457-6123 https://www.suac.ac.jp/

SUAC'S OB 卒業生の活躍

建築家 ／ 京都芸術大学 専任講師

中村（なかむら） 紀章（のりあき）さん

2004年 デザイン学部空間造形学科（現デザイン学科）卒業

大学の進学先を迷っていたとき、幼いころに通っていた画塾に通い始めました。絵を描くことや建築、家具などに興味があり、文系でも建築を学べるSUACに出願。完成間近の大学を見に浜松を訪れ、当時再開発中の大学周辺を歩いたとき、気持ちの良い風が吹く気候が気に入ってSUAC進学を決めました。

当時在籍していた「空間造形」という学科では建築に限らず空間にまつわる様々な授業を受けましたが、建築分野に進むと決めたターニングポイントは、3年次に行った「オープンデスク」でした。設計事務所などに出向き実務を経験するもので、主に住宅を扱う大阪にある事務所で2週間活動しました。専門用語が飛び交う現場で建築の面白さを感じ、4年次には寒竹研究室（建築・都市デザイン）に所属。卒業後の進路を考える中でより幅広い知識を学びたい、他大学での学びも経験してみたいと思い大学院への進学を決めましたが、卒業制作の講評は散々でした。建築には多様な考え方が存在するので落ち込む必要はないと先生になだめられたことを覚えています。

進学した大学院は、一期生として入ったSUACではいなかった“先輩”の存在が大きな違いでした。所属した貝島研究室は設計の前段階となるリサーチを重視していて、プロジェクトの中でリサーチの面白さを学ぶことができました。学部時代の設計課題では架空の施主を想定しなければならず、ある意味で責任のない自由な発想をすることが出来ましたが、大学院のプロジェクトではその場所に関わるあらゆる事象を考慮し、学部時代とは違ったリアリティを感じて設計に取り組むことができました。研究室ではチームで設計することが多く、自分の発想をどのように伝え他人と共有していくのかという視点を改めて深く考えることにも繋がりました。

「寺島町リノベーションワークショップ」（2017年）
浜松の築35年のアパートを学生のデザインによって改修するプロジェクト。大きな土間に面した建具の開閉によって間取りを変化させる。実際の賃貸物件として住まわれている。

「寺島町リノベーションワークショップ」の様子。天内准教授（本学デザイン学部）もワークショップ講師として参加。

神戸に建つ新築の戸建て住宅。L型の平面形状をしており、建物の裏側に周囲の建築に囲まれた中庭的空間を持つ。

修了後は東京にある個人設計事務所に勤め、その後一級建築士資格を取得。その頃、寒竹先生からSUACのプロジェクトを手伝ってくれる人を探しているということで声がかかり、母校に戻ることになりました。後にSUACでは非常勤講師も務め、後輩たちへの指導の機会もいただきました。現在では浜松で当時知り合った人たちやSUACの後輩たちと一緒にプロジェクトに取り組むこともあります。そもそも建築は様々な分野の関係者とともに場所を作り上げていきますが、そういったプロジェクトではそれぞれが持つ人脈から多くの登場人物が関係することによって、より豊かな場所をつくりあげることができると感じています。

現在は活動の拠点を神戸に置き、2012年には同じく建築家である兄と共同で設計事務所を立ち上げました。設計に取り組むうえで大切にしているのはクライアント（施主）と一緒に「まち」について考える、ということ。クライアントの注文通りに作るのでも、建築家の提案通りに作るのでもなく、住む人が社会と接点をもつ空間を持ち、「まち」をつくる一員となるような建築を目指しています。京都芸術大学の講師に着任してからの学生との向き合い方も同じです。建築には一つの答えがあるわけではありません。それを学生と一緒に考えて建築の在り方を模索する、そんな空間を大切にしていきたいと思っています。

Profile

兵庫県神戸市出身。静岡文化芸術大学第1期生としてデザイン学部空間造形学科に入学。卒業後、筑波大学修士課程芸術研究科に進学し、都内の設計事務所を経て、2012年「中村×建築設計事務所」設立（共同主宰）。2020年4月より京都芸術大学専任講師。

中村×建築設計事務所
https://www.n-axa.com
〒650-0015 兵庫県神戸市中央区多聞通3-2-12 4F
E-mail. contact@n-axa.com

編集後記

2020年度は誰もが予想しなかったはじまりとなり、学生、教職員が一丸となってこの状況に立ち向かってきました。ここで一度、踏みしめてきた道を振り返り、今いる場所を確かめる時期が来ているのかもしれません。キャンパスで学生の皆さんと会える日を楽しみに。
【広報誌に対するご意見、ご感想をお待ちしています。第12号は2021年3月の発行予定です。】

特別鼎談

コロナの先に、描く未来とは。

世界的な新型コロナウィルスの蔓延。これは、間違いなく世界史的な大事件です。この危機の中から、私たちはどのようにして未来に向き合っていけばいいのか。世界共通のテーマについて、3人の先生方に語り合っていただきました。

かとう　ゆうじ
加藤裕治
文化政策学部文化政策学科教授。文化政策研究科長。

もり　しゅんた
森 俊太
文化政策学部文化政策学科教授。副学長。

おばま　ともこ
小浜朋子
デザイン学部デザイン学科（デザインフィロソフィー領域）教授。学生部長。

コロナ禍の中で見えたもの

── 最初に、コロナ禍の現状をどう捉えていらっしゃいますか？

森　大学としては、授業形態が最も大きな課題になっています。遠隔授業を続けるのか、対面授業へ戻すのか。これは、世界中の大学が共通して直面している悩みだと思います。本学の場合は、後期からは対面授業に戻すことを決断しました。アンケートで確認した学生の希望も、「対面」が「遠隔」を10ポイントほど上回る結果でしたし、教員も「対面授業」の重要性を強く感じていましたから。

　どうするのが良いのかは簡単に結論が出ないと思います。ただ、コロナ禍を単に危機と捉えるのではなく、より良い教育を目指すためのチャンスと捉えていきたい。遠隔授業の体験は、資産になるはずです。社会全体では、働き方改革やワークライフバランスがより重要な課題となっている時代にあって、コロナ禍は、その解決策を考えるきっかけになる。今後、育児や介護をしながらでも余裕をもって働ける社会を作っていくための方法を見出す機会にしたいと考えています。

加藤　大学の現状は、まさに森先生のおっしゃるとおりですね。4月に緊急事態宣言があり、都道府県間の移動が制限されましたが、多くの人が解除されるまでの辛抱だと思っていたわけです。しかし、現在の状況を見ると、とても「アフターコロナ」とは言えない。「未来をどう考えればいいのか」という問いの前で右往左往しているのが現状です。先が見えない中で、目の前のものを一つずつ解決しながら進むしかない。そんな状況になっていると考えています。

小浜　おっしゃるように現在は「見えないモノと戦っている」状況で、人間の根本的な心の部分が表面に出て来ているのではないかと思っています。

　そう考えるきっかけは、遠隔授業でした。インターネットを介したお互いの顔が見えない状態でも、声の抑揚だけで嬉しいとか悲しいとか心の動きをなんとなく感じる。小さな機微から喜びや不安を感じとる。本来人が持っている細やかな感覚を様々なフェーズで交わすことが出来ました。「優しさ」や「マナー」、「礼儀正しさ」、「気配り、思いやり」といったものを日々感じとってきたからかもしれません。これは、コロナ禍でなければ、体験できなかった。

　これまで国内で体験してきた災害とは違います。災害は地域が限定していますから、被災地でなければ体験できないことがたくさんあります。しかし、コロナ禍は見えないものとの戦いで、世界中すべての人が当事者です。捉え方によっては、世界が一つになる

チャンスなのかもしれません。その視点は、大事にしたいと感じています。

リモートが変えたもの

――コロナ禍で最も変わった点の一つがリモート体験だと思います。その体験を経て、社会はどう変わっていくでしょうか。

森　遠隔授業で、最も影響を受けたのが1年生です。4月からはほとんど大学に来ることができていません。1年生にとっては、期待していたキャンパスライフそのものが始まっていない。大学生になった実感がないまま、時間が過ぎていくのはとても大きな問題です。次に影響を受けているのが、4年生です。4年生には卒業論文も卒業制作もある。個別指導が特に必要な時期なのです。大学院生も同様で、修士論文のための調査を進めることができなくてとても困っています。それは教員側も同じです。直接会ってきめ細かな指導ができないのですから。

本来ならば、対面授業で学生の反応を見て、理解度を把握しながら指導していくのですが、それが難しい。また、クラスメイトが隣にいれば、お互いに質問したり助言したりして助け合いながら研究を進めていくことができますが、それも十分にできない。大学にとっては、学生たちが集い相互に学ぶコミュニティとしての機能が、決定的に重要だということを再認識しました。

加藤　遠隔授業が始まった当初は、物珍しさもあって学生たちにも好評だったのです。オンデマンド形式であれば、もう一度見返すこともできるし、理解できるまで繰り返し受講することもできますから。それが6月になると変わってきたのです。ゼミでも「対面形式が良い」という意見が大きくなっていきました。

通常ならば新3年生は、4月に教員や互いのゼミ生と初顔合わせをして、そこから共に学んでいきます。ですが今年は、リモートのため、互いの仲を深めていく時間が作りにくい。確かにリモートでも学びは十分にできるのですが、一緒に学ぶ仲間をもっと知りたい、会って話をしてみたいなど、時間が経つほど人への興味が湧き、リモートでは物足りないようです。

小浜　リモート体験でいえば、私は授業で提供するパワーポイントの資料を、さらにスライドショーに加工してYouTubeにあげたところ学生からは、とても感謝されました。

速度を上げて再生したり、飛ばして必要な個所だけ再生したり、自分で調整できるからよかったと。資料のダウンロードや音声データとうまく連動させながら、自分で情報の入手方法を工夫している。それは学生自身が体験的にやっているんですね。結果的に、例年に比べ授業への出席率は高く、離脱する学生も少なかったです。

また、対面で一人ひとりの状況を見ながら指導していたデザインの演習授業では、事前に学生からラフ案を送ってもらい、当日はオンラインで公開ディスカッションを行うスタイルで実施しました。制作した学生と複数の教員が、作品について良い点や改善する余地などを気兼ねせずに話すわけです。これが好評で、毎回70人の受講者の内、40人から50人が参加し、教員は3時間フルで対応、補講もしたほどです。自分から積極的にアピールすることが苦手な学生たちも、クラスメイトの作品に対する指導を聞くことでとても勉強になったようです。実は私にとっても、他の先生の考え方を自然な形で聴くことができたので、とても貴重な機会で楽しかった。これは顔が見えない遠隔授業だったからできたスタイルといえるかもしれません。

森　対面授業に積極的に参加することがあまり得意ではない学生は、遠隔の方がストレスなく安心して参加できると話しています。対面授業と遠隔授業のそれぞれの長所が明らかになり、二つの組み合わせの可能性が広がってきたこと。それが、大学教員にコロナ禍がもたらした気付きの一つと言えそうです。

働き方はどう変わるか

――テレワークの導入が当たり前になったことで、ワークライフバランスはどう変わるでしょうか。

森　働き方のスタイルがさらに多様化していくでしょう。男女共同参画の面では特に女性の活躍の幅を広げることが考えられる。子育てや介護をしていても継続的に働くことができる。それは男性にとっても、重要です。ワークライフバランスの変化という意味では、大学は生涯教育の機能を充実するなど、社会における役割を本質的に見直すことがより一層必要になったと思います。

加藤　オンライン化も必要に迫られて急速に進みました。自宅で仕事をすると、公的な部分と私的な部分の境界が見えにくくなります。自宅での仕事は、労働時間が長くなる傾向も指摘されています。

また企業の対応も異なってきています。アメリカの大手IT企業では、オフィスは捨てないで、対面での仕事はクリエイティブな時間として位置付け始めています。テレワークに対しては、家庭内環境を整えることを重視すると宣言していました。一方、日本企業の中で、オフィスを無くせば賃貸料をカットできて経費削減になるという議論が出ていたのを見たときは少々残念でした。もっと総合的な視点で、課題と可能性を検討していく必要がありますね。

小浜　ワークライフバランスでは、「自分の本質から考えて、何を重視するか」という価値観が大切になるでしょう。

色々な働き方ができるからと、頑張り過ぎてしまう可能性があります。遠隔授業でも真面目な学生ほど、やるべきことを多く詰め込んできつくなってしまう傾向がありましたから。だからこそ「自分でコントロールすること」が大事だと思います。好きなことをどう管理したら、意欲と生活のバランスがとれるか。それを考えれば、思った以上に解決策は増えると思います。

日常をどうデザインするか

――コロナ禍は人類全体で取り組む課題です。未来のために発信できることは、どのようなことが考えられるでしょうか。

森　学生に対しては、このような危機の時代だからこそ、周りに流されず自分の価値観を意識できるようになってほしいと思います。自分がやりたいことは何か。大切にしたいことは何か。そのような問いにゆっくりでいいので向き合っていってほしい。ワークライフバランスをより重視する時代になれば、自分の価値観を大切にすることが重要になっていきますから。大学は、学生たちが自らの価値観を模索する場と時間を提供する存在でありたいと思います。

また、繰り返しになりますが、コロナ禍を経たことで、大学は、これまで以上に社会的な存在意義を再考することが求められていると感じます。真剣に取り組まずに何もしないと惰性で元に戻るだけになってしまうでしょう。大学というしくみが、大胆な自己改革も含めてどのように未来に貢献できるかを考えるのが、これからの私たちの課題になるでしょうね。

加藤　コロナ禍は、「自然と人間」をどう考えるかという課題を突き付けたともいえます。その問題も含め、私たちは世界史的な大事件の真っただ中を生きています。世界は、グローバル規模で拡大する資本主義の流れに乗ってきましたが、コロナがそれを立ち止まらせたことは間違いない。もちろん資本主義の恩恵を受けて、今の生活がある。経済を元に戻すことも必要です。しかし一方で、今までのやり方はおかしい点もある。コロナは、それを気付かせた面もあると思います。

コロナ禍が過ぎれば、一見、元の世界に戻ったように感じるでしょう。しかしコロナのインパクトは、私たちに大きな何かを残したと思います。

今後、インターネットといったテクノロジーは、これまで以上に否応なく私たちの生活を変化させていくでしょう。うまく使えば働き方や環境問題などに対して、これまでとは異なったアプローチを可能にしそうです。

いずれにせよ、このコロナ禍によって、人が豊かに幸せに過ごしていくためには、どの方法が良いのか。どんな世界を目指すべきなのか。そんな根源的な問いを考えさせられました。

小浜　私は、「新しい生活様式」という言葉には違和感があります。これまで日々積み重ねてきた生活様式は、「感染予防の作法」を取り入れるぐらいで大きく変わるものではないと思うからです。

しかし、ちょっと変わってきたこととして、日常生活のささやかなことにも、自分の中の本質に照らし合わせながら「必要なものとそうでないもの」をさりげなく取捨選択するようになってきているように感じます。例えば、旅行。これまでは、気の向くままに消費することが目的のひとつになっていましたが、今は、自分にとって何が必要なのかを、一人ひとりが意識するようになってきています。それが積み重なって、「あんな時期があったね」と振り返るような変化となり、大きな意味を持つようになっていくのだと思います。

コロナ禍は、すべての人が経験をしているのですから、多かれ少なかれ感じることはあるはずです。その思いを各々が生活の中に反映し、緩やかに軌道修正していく中で、日常との新たな関わり方が生まれてくるのではないでしょうか。今は、そんなことを考えています。

――とても興味深いお話をお聞きできました。本日はありがとうございました。

（8月6日 静岡文化芸術大学 自由創造工房にて）

未来へつなぐ知と実践
SUAC20

式典・イベントの開催について

新型コロナウイルスの感染が拡大している状況を考慮して、
以下の催しは開催中止といたしました。
誠に残念ではございますが、何卒ご理解くださいますようお願い申し上げます。

開催中止		
	記念セレモニー事業	● 大学創立20周年記念セレモニー（2020年7月4日）
	国内外発信事業	● シンポジウム及びイベント（2020年6月～2021年3月）
	卒業生・修了生ネットワーク事業	● 同窓会祝賀パーティ（2020年5月23日）

なお、「国内外発信事業」「卒業生・修了生ネットワーク事業（同窓会祝賀パーティ）」については、来年度以降の開催について今後検討する予定です。

デジタルアーカイブサイトが公開されました

本学がこれまで発行した刊行物や開催したイベント関連資料、画像・動画などのメディアファイルなどをアーカイブ化。特設Webサイトの公開が始まりました。
今後も随時資料を公開し、本学の歴史を積み重ねてまいります。

https://www.suac.ac.jp/archives/

こちらからご覧ください ▼

20周年記念誌の編集が進んでいます

本学の20年のあゆみをたどる「20周年記念誌」では、来賓の方々からのお言葉をはじめ、ゆかりある方々による対談も掲載します。
4月には川勝静岡県知事をお迎えし、有馬理事長、横山学長を交えた鼎談が行われました。和やかな雰囲気の中で語られた内容をお楽しみに。

静岡文化芸術大学基金（教育研究支援・修学支援事業）寄附者ご芳名

（令和2年1月1日から令和2年7月31日まで）

ご寄附を頂戴した方々のご厚意に心から感謝を申し上げますとともに、謹んでご芳名を掲載させていただきます。
今後、学生が行う海外留学や研修等の自主活動への支援に充てさせていただきます。
皆様には引き続きご理解とご支援を賜りますようお願い申し上げます。

寄附金額 324,000円（内訳：教育研究支援211,000円、修学支援事業113,000円）

寄附者ご芳名（五十音順、敬称略）【 個人 】

アバス マリ	天野芳建	池谷直樹	伊藤彰	岩倉義典	小川哲史
尾﨑兼一	小久保雛子	齋藤蒼	酒井葉月	佐藤あつ子	正保吉明
鈴木明	角谷権	立花昭宏	中澤明音	服部博和	伴優月
坂東康宏	檜原司	平田隆	廣濱俊伸	藤枝智	前田伸二
松下凛々	松田健三郎	松永宏実	森茂樹	森田英夫	渡邉壮耶

※ご芳名の掲載を希望されなかった方（28名）を除いて掲載しております

SUAC
教員研究紹介 Vol.3

井上（いのうえ） 由里子（ゆりこ）准教授

文化政策学部 芸術文化学科

研究分野
【 演劇学、西洋演劇史】

芸術への興味

趣味で写真や映画、美術に親しむ家族の中で育ちました。

子供の頃から活発で、好奇心旺盛。野山を駆け回るかたわら、ピアノやバレエ、書道を習いガールスカウトでも活動しました。

また読書が好きで、自宅にあった『少年少女世界の名作文学』に夢中になりました。シェイクスピア『ハムレット』の小説版で、ハムレットの父の亡霊が現れた場面に身震いしたのを覚えています。得体の知れないものに触れた感覚。今思えば、演劇に接した初めての体験だったのかもしれません。

回り道をして演劇研究の世界へ

実は、大学では政治学を専攻していたのですが、芸術への思い断ちがたく、卒業後フランス語学留学し、演劇や映画の授業を受けました。帰国後は文学研究科で映画を研究対象としたのですが、ドラマの基礎を学ぶ必要を感じ、ベルギーの演劇研究センターに留学しました。

そこで演劇学の面白さを知り、この道を進もうと思うようになりました。

演劇学の魅力

日本では娯楽と思われがちな演劇ですが、西洋では「時代を映す鏡」と言われ、民主主義の議論の場になった古代ギリシア以来、社会と密接な関係をもってきました。演劇を通して西洋世界を立体的に捉えられる点に、大きな魅力を感じています。古典劇は現代に上演されると、私たちの社会を照らし出してくれます。演劇は作品がモノとして残りませんが、「今・ここ」にしかないからこそ、古典が生き生きと蘇るのではないでしょうか。

ノヴァリナの演劇、演劇とアール・ブリュットの接点について

ベルギー留学時代に出会った、ヴァレール・ノヴァリナの演劇を軸に研究を進めています。ノヴァリナは喜寿を迎えてなお現役を続けるフランスの劇作家・演出家です。ピカソの絵を言葉にしたような前衛演劇なので、語源などを調べ造語の意味を解読する日々です。

こうした微細な仕事と並行して、演劇とアール・ブリュット（生（き）の芸術）の接点も探っています。アール・ブリュットは、独居老人や障害者など、正規の芸術教育を受けていない人の美術作品です。舞台にも老いや障害を一つの個性として活かした身体表現があるため、それをコール・ブリュット（生（き）の身体）という新しい概念で捉えられないかと考えています。浜松の路上演劇祭で見た演目が研究テーマに結びつきました。海外の研究者や演劇人との交流からも大きな刺激を受けています。

Profile

ルーヴァン・カトリック大学演劇研究センター（修士課程）、大阪大学大学院文学研究科（博士後期課程）を修了。博士（文学）。2017年本学専任講師、2020年より現職。
演劇研究の傍ら、劇評やデザイン関連の翻訳も手がける。主要業績に論文「演劇とアール・ブリュット―ヴァレール・ノヴァリナの俳優論を中心に」（『a+a　美学研究』）、劇評「チェーホフの世界に戯れる―地点第19回公演　喜劇「かもめ」」（京都芸術センター）、共訳『シャルロット・ペリアンと日本』（鹿島出版会）等。

©Christophe Raynaud de Lage / Festival d'Avignon

＜ 井上先生おすすめの芝居 ＞

『アンティゴネ　～時を超える送り火～』

作／ソフォクレス
劇団／SPAC-静岡県舞台芸術センター
構成・演出／宮城聰

SPAC版『アンティゴネ』は、2017年、世界三大演劇祭の一つであるアヴィニョン演劇祭のオープニングを飾った作品。約2500年前のギリシア悲劇では、兄弟間の王位争いをめぐる葛藤が描かれます。母国を攻めた弟は現代でいえばテロリストとなりますが、宮城氏の演出は、「死者はみな仏」という東洋の死生観を取り入れることで、にくしみの連鎖を断ち切り、赦しの物語に仕立てあげました。西洋の古典劇と、精霊流しや盆踊りなどの和の要素が野外劇場の自然と溶け合う至高の総合芸術です。（井上先生）

ノヴァリナのパリのアトリエ。壁一面に原稿を貼って劇構成を考える独特の創作方法（2018年８月）

障害者の俳優からなる（蜂鳥劇団）の稽古風景
（2019年10月、ルーベ、フランス）

知と実践の力

SUAC TOPICS

TOPIC 01 本学デザイン学部の学生が「第13回メディア・ユニバーサルデザインコンペティション」で経済産業大臣賞を受賞

全日本印刷工業組合連合会が主催する「第13回メディア・ユニバーサルデザインコンペティション」にて、デザイン学科有志メンバー9名によるグループ「ZOO PIC（ズーピック）」の作品が、学生の部（商品企画部門）の最高賞にあたる経済産業大臣賞に選ばれました。
受賞作品は、浜松市動物園からの依頼で作成した「動物展示スペースの場所が一目でわかるような新しい案内板」。何度も検討を重ね、子供や外国人、色覚異常の方にも配慮したイラスト、フォント、コントラストを採用しました。親しみがもてるデザインでわかりやすい、と来園者や園職員から好評を得ています。

TOPIC 02 静岡県青少年ブラジル派遣事業に本学学生5名が参加

日伯移民110周年を契機にした静岡県の派遣事業の一環として、県、外務省、ブラジル静岡県人会が連携して実施された「ブラジル青少年派遣事業」に、本学学生5名が参加しました。
日本文化の戦略的対外発信拠点として外務省が海外3か所に設置する「ジャパン・ハウス」のうち、サンパウロ市にある「ジャパン・ハウス・サンパウロ」で6日間のインターンシップに参加。英語及びポルトガル語でのプレゼンテーションにも取り組みました。

TOPIC 03 卒業証書・学位記の授与を行いました

（2020年3月17日）

新型コロナウイルスの感染拡大を受け、卒業証書・学位記授与式の開催は中止となりましたが、卒業証書・学位記の授与については、感染防止の対策を講じた上で、卒業生・修了生と教職員のみで小規模に行われました。
華やかな袴姿やスーツを着て集まった卒業生・修了生たちは、各学科ごとに教室に集まり、教員や仲間との時間を過ごしました。

TOPIC 04 本学同窓会から新しい校旗が贈呈されました

静岡文化芸術大学創立20周年を記念して、本学同窓会から新しい校旗が贈呈されました。校旗が新調されたのは開学以来のことです。
本学同窓会は本学の卒業生・修了生で構成される組織で、贈呈式では梅谷拓宣会長（第一期生・文化政策学部卒）から、有馬理事長、横山学長に新校旗が手渡されました。
今後は式典等の公式行事で使用される予定です。

PICK UP STUDENT

目標だった自動車デザイナーに内定した

小林（こばやし） 大地（だいち）さん
（デザイン学部 デザイン学科4年）

小林さんは、子供の頃から目標にしてきた
自動車デザイナーを目指して本学で力を養い、見事内定を獲得しました。

――これまでの大学生活を振り返って、印象的な出来事について教えてください。

自分と同じ夢を持つライバルと出会えたことです。私は中学生の頃から自動車のデザイナーになる一心で勉強をしてきました。3年次の8月には、トヨタ自動車が主催する5日間のインターンシップに参加し、現時点の自分の実力や全国での位置を把握するとともに、何にも変えがたい同じ夢を持つ仲間と出会いました。大学の同期には自動車のデザインを志す仲間がいなかったため、そのライバルたちの存在がモチベーションを保つ力となり、3年次の2月の最終実習で必要なポートフォリオの質の向上に大きく繋げることができました。自動車のデザイン業界は他の業界と比べて採用活動の始まりが早いため、周りがまだゆっくりしている中で作業をすることが辛いことも多くありました。そんな中でもライバルたちは着々と準備を進めていると考えると居ても立ってもいられず、闘争心で作業に没頭できました。そんなライバルたちとはSNSで進捗を報告したりして、お互いを鼓舞しあいながら就職活動に専念してきました。私の中でこの仲間との出会いが最も自分を成長させてくれました。

――希望業界・職種に内定するため、どのような努力や工夫をされましたか?

実習ではアイデアを幅広く展開する力が求められるため、全体で400枚程度のスケッチを展開しました。インターンシップ参加の選考基準であるポートフォリオ（過去の作品集）の質にもこだわりましたが、実習の成果の方が評価されます。そのため、大学のゼミなどの演習では幅広いアイデア展開をいつも意識しながら、講義で学んでいる抽象的なデザイン思考と、具体的な提案するカタチとの間を常に行き来しながら、デザインを展開する力を身につけてきました。インターンシップではその成果が存分に発揮できたと思います。

――残りの大学生活をどのように過ごしたいと考えていますか?

卒業制作を通して、製品デザインに限らず世界の文化や歴史など、様々なものに触れ自分の中の引き出しを増やし、多方面からデザインにアプローチできる力をつけたいです。今、デザインのあり方が大きく変化し、特に自動車は100年に一度の変革期といわれ、これからのモビリティが私たちの生活に全く新しい価値観をもたらします。その未来を創るのがデザイナーなのです。そのために様々な知識を蓄えることが、今最もすべきことであると考えています。モビリティのデザインを介して、私たちの未来の生活を素晴らしいものにするための力を養っていきたいと思います。

キャリア支援室より

就職状況

2019年度の卒業生（17期生）の就職状況について報告します。

全体の就職率は96.6%と高水準を維持し、ここ数年の売り手市場と呼ばれる採用状況が反映されたかたちとなりました。

業種は、文化政策学部では小売（23%）サービス（20%）製造（19%）金融（15%）が、デザイン学部ではサービス（51%）製造（25%）建設（10%）が主な就職先となります。

職種は、文化政策学部では事務（39%）販売（36%）サービス職（12%）が、デザイン学部ではデザイン関連職（デザイナー、設計職等 65%）が中心となっています。

就職した地域は、静岡県37%、東京都26%、愛知県19%となっています。

2020年度卒業予定者の就職活動は、新型コロナウイルス感染拡大の影響を受け企業の採用日程や試験方法等が大幅に変更されたことによって、苦戦を余儀なくされています。

キャリア支援室では、最新の動向を注視しながら、近隣大学や地元自治体等とも連携し、学生一人ひとりの志望や活動状況に合わせてのアドバイスや求人情報の提供等きめ細やかな支援を行っていきます。

2019年度卒業者：就職状況（2020年3月31日現在）　（人、%）

	卒業者	就職希望者	就職者	就職率
文化政策学部	221	202	199	98.5
デザイン学部	108	91	84	92.3
合 計	329	293	283	96.6

主な就職先

文化政策学部

（株）河合楽器製作所、（株）杏林堂薬局、サントリーパブリシティサービス（株）、（株）ジェイティービー、静岡県教育委員会、静岡県庁、（公財）静岡市文化振興財団、静岡市役所、（株）静岡新聞社、スズキ（株）、鈴与（株）、セキスイハイム東海（株）、とびあ浜松農業協同組合、（独）日本芸術文化振興会、（株）日本旅行、浜松磐田信用金庫、浜松市役所、浜松ホトニクス（株）、東日本旅客鉄道（株）、ヤマハ発動機（株）

デザイン学部

愛知県教育委員会、（株）インテリジェントシステムズ、クリナップ（株）、（株）コーエーテクモホールディングス、神戸市役所、スズキ（株）、セイコーエプソン（株）、（株）セーラー広告、（株）タカハ都市科学研究所、タマホーム（株）、東映アニメーション（株）、（株）TOKAIホールディングス、（株）日産オートモーティブテクノロジー、パナソニック映像（株）、飛騨産業（株）、フランスベッド（株）、堀部安嗣建築設計事務所、（株）本田技術研究所、（株）MAPPA、ヤマハ発動機（株）

保護者会の実施について

5回目となる本年度の保護者会は、コロナ禍の中会場に参集しての実施は難しいと判断し、オンラインで実施することとしました。

初めての試みとなりますが、遠隔地から参加していただきやすい、参加人数に制限がないといったオンラインならではの利点を生かしながら、例年好評をいただいている最新の採用動向解説やパネルディスカッションなどはオンラインでも継続して実施できるよう準備を進めています。

昨年度の様子

コロナ禍でのキャリア支援

本年度のキャリア支援事業は、対面しての相談や参集しての行事実施などが制限されるなかで、以下のような対策を取りながら実施しています。

- 遠隔地に居住する学生や、対面に不安を覚える学生に対しては、スカイプやMicrosoft Teams等を用いたオンラインでの相談を実施
- 対面での相談を希望する学生は、予約制にて受け付け、アクリル板や消毒液の設置、マスク着用の徹底等により感染リスクを低減する対策をとって実施
- 資格取得等支援講座は対面と非対面（オンライン等）の両方で準備をし、コロナウイルスの状況に関係なく講義を進められるよう対策

先行きは非常に不透明な状況ですが、学生がコロナ禍の影響を極力受けずに就職活動できるよう努めています。

飛沫防止アクリル板を介しての対面相談

新任教員紹介

中田 健太郎

NAKATA Kentaro　【国際文化学科 講師】

今年の4月に、国際文化学科の専任講師となりました、中田健太郎と申します。フランス語の授業と、フランス文化や国際文化にかんする講義を担当いたします。

私が研究してきたのは、20世紀前半にフランスではじまり、世界各国にひろまったシュルレアリスム運動です。シュルレアリスムの文学・芸術は、言葉やイメージを意外なしかたでくみあわせる、現実ばなれをしたものだと言われることもあります。しかし、シュルレアリスムは「超現実主義」と訳される、ある種の現実主義です。それは、いままでにはなかったようなしかたで、驚きとともに世界を見つめる、現実のあたらしい発見法でもあります。現実を新鮮に見つめる方法をしめすことは、文学・芸術の変わらない役割でしょう。授業では、学生さんたちに驚きを感じてもらいながら、文化と社会の現実的な関係について、考えるきっかけを提供することができればと願っています。

西脇 靖洋

NISHIWAKI Yasuhiro　【国際文化学科 准教授】

今年度より国際文化学科に国際関係論の担当教員として着任しました西脇靖洋です。私はこれまで、ポルトガルを中心としたポルトガル語圏諸国の対外関係について中心的に研究を行ってきました。熱海市とポルトガルのカスカイス市は、現在、姉妹都市の関係にあります。また、静岡県や浜松市はブラジル移民との共生を一つの課題として掲げています。私は、以上のようにポルトガル語圏諸国と密接な関連性を有するこの静岡県や浜松市において、自らの研究をさらに発展させる所存です。また、それらの研究によって得られた知見をもとに、教育の場では、理論と実証の双方の側面から国際社会のさまざまな問題について考察し、国際関係論という学問の楽しさを学生に伝えたいと考えています。

田中 裕二

TANAKA Yuji　【芸術文化学科 准教授】

今年度より芸術文化学科に着任いたしました、田中裕二と申します。

博物館の管理や運営に関する博物館学、近代日本の企業経営と芸術支援について研究を進めています。本学では学芸員資格の取得に係る授業を担当します。私はこれまで東京の公立博物館で約20年間学芸員として勤務してきました。博物館では学芸部門と管理部門の双方を経験し、行政機関では美術館やホールなどの文化施設の管理運営を担う部署で実務を担当してきました。現場で培ってきた知見を活かし、博物館の学芸員に必要とされる知識や技能は全てお伝えするつもりです。卒業後は博物館や行政機関に限らず、ひとりでも多く芸術文化に関係した分野で活躍することができるように全力でサポートする所存です。

Jérôme BOULBÈS

ジェローム・ブルベス　【デザイン学科 准教授】

今年からデザイン学科にお世話になっております、Jérôme BOULBÈS（ジェローム・ブルベス）です。私の専門は、3DCG映像からアートアニメーションやゲームまで多岐にわたります。イラストレーションを学び、短編映像作家として、最先端テクノロジーと伝統的な技術を併用し、物語的または実験的プロジェクトをつくってまいりました。映像世界は社会的変化および技術革新とともに、日々、急速に変化し良くも悪くも日常生活の一部となっています。そのため、技術的および創造的なスキルだけでなく、批判的思考と自律性にも焦点をあてた学びを学生とともに進めております。私はフランス出身ですが、国際的な視野を学生達と共有し、彼らの好奇心を素晴らしい日本の文化は勿論のこと、世界中に溢れている優れた映画や芸術に開放したいと考えております。どうぞ宜しくお願い致します。

松田　達

MATSUDA Tatsu　【デザイン学科 准教授】

はじめまして。今年度よりデザイン学科　建築・環境領域に着任いたしました松田達と申します。建築意匠、都市計画、コンピューテーショナルデザインといった分野を専門にしており、建築と都市、理論と実践のあいだに橋を架ける活動を行うことをモットーとしています。これまで出身の金沢、大学以降の東京、渡欧時代のパリという3つの都市に住んできました。浜松は、自分にとって4つめの都市になります。日々、浜松の魅力発見に勤しみつつ、この街を楽しませて頂いております。この浜松から、建築、都市における活動と最新の情報を、学生も巻き込みつつ、世界に向けて発信していきたいと思っています。建築は幅の広い分野であり、様々な分野の方々と協働していけると思っています。ご機会がありましたら、ぜひお声がけいただければ幸いです。浜松そして静岡の建築文化と都市をもり立てていけますよう、尽力したいと思っております。